

## 令和5年度第7回景観審議会デザイン協議部会 会議要旨

### 1. 審議会（部会）の日時、場所、出席者、議事

- (1) 開催日時 令和6年（2024年）1月26日（金） 午後3時30分～同4時30分
- (2) 開催場所 宝塚市立中央公民館 2階 209、210学習室
- (3) 出席者
  - ・ 景観審議会デザイン協議部会委員  
徳尾野部会長、川崎委員、澤委員、高木委員、山根委員、戸川委員、廣田委員
  - ・ 事務局（都市整備部 都市整備室 都市計画課）  
濱田部長、福田室長、谷口課長、下山係長、武田職員、白川職員
  - ・ 事業者  
議事① 事業者 阪急電鉄株式会社  
設計者 株式会社久米設計
- (4) 議 事  
議事① 宝塚大劇場新ビル建設計画
- (5) 傍聴者  
議事① 2名

### 2. 会議の要旨

事務局： 本日のデザイン協議部会は、委員8名中6名の出席がありましたので、宝塚市景観審議会デザイン協議部会の設置及び運営に関する規程第5条に準用する宝塚市景観審議会規則第6条第2項の規定により成立する旨を報告します。

景観審議会運営規程第3条第1項の規定に基づき、本日の議事は全て公開となっています。本日は2名の傍聴希望がございましたので、会議冒頭から入室いただいておりますことを報告いたします。また、部会の設置及び運営に関する規定第3条2項により、廣田委員にご協力をいただいております、合計7名の委員の方に協議いただきます。

会 長： 本日の署名委員は、2番の川崎委員と7番の山根委員です。

☆☆☆☆ 宝塚大劇場新ビル建設計画（2回目） ☆☆☆☆

会長： 前回からの変更点やその他説明等がございましたらお願いします。

設計者： 前は、計画の大きなコンセプトについてお伝えしきれておりませんでしたので、冒頭で少し設計コンセプトやこれまでの経緯などについてご説明させていただきたいと思います。

今回の計画は、中世ヨーロッパのまちなみのような景観づくりをコンセプトとして進めて参りました。また、武庫川対岸からの景観も重要視して、見え方について配慮しながら計画しています。

例えば、既存の大劇場と今回計画建物の上に細いパサージュを設けて、大きな既存クスノキ、武庫川までを繋ぐことで、武庫川への抜けを意識しています。また、武庫川に面する低層部には、アーチ状のデザインで圧迫感を低減するよう配慮しました。

その他にも、外観デザインはこれまで何度も修正を重ねてきております。特に武庫川対岸からの見え方については慎重に、丁寧にデザインしてきました。屋根の面積をなるべく大きくとることなどは、事業者からの要望に応えたもので、長年この場所を良く知る事業者だからこそその思いとして受け止めて、反映しています。

今回計画する建物は、大劇場の機能とは若干異なることもありますし、色合いや素材感、形状等について、既存の大劇場と全く同じものとはなりません。しかし、色合いや素材感や形状はイメージを共有し、まちなみとして調和した景観となるよう配慮しました。

事業者： 宝塚大劇場を始めとするこの周辺の武庫川沿いの景観は、宝塚歌劇発祥の地として大切に守り、継承していきたいと考えております。また、宝塚らしい景観の一つとして、非常に重要な場所であることも十分に認識し、今回計画建物の外観デザインについては、しっかりと検討する必要があることを強く意識しながら計画を進めてきております。

宝塚大劇場は、1990年代前半に完成して以降、大きな増床をしてきておりません。近年の事業構造や社会情勢の変化によって、事務所スペースや倉庫、稽古場、収録スタジオ等の様々なバックスペースが不足している状況です。今後の事業継続のためには、これらの課題を解消する必要があります。景観上は大きな影響を与える立地、ボリュームでの計画となりますが、総合的に考えますと敷地内ではこの位置でしか計画できず、また、必要最小限のボリュームでの計画です。この状況の中でも、できるだけ周囲と馴染む建物となるよう、慎重

に検討して参りました。

補足のご説明として、これまでの外観デザインの検討の変遷をお伝えしたいと思います。まず、敷地内の制約が多い中でも、建物が大きな板状の壁面となることを少しでも解消するため、僅かではありますが、東西の両端部分は前面からセットバックさせ、できるだけ壁面に変化がつくよう配慮しました。

その後、屋根の面積ができるだけ大きくなるように調整するとともに、周辺の既存建物にも採用されている横連窓のイメージを取り入れることや、庇を追加すること、樋や側面窓を配置して、壁面の分節化を図ることなどにより、周囲と馴染むデザインとなるよう検討して参りました。

そしてこの度、前回のご意見を参考に、屋根の形状を変更し、より大きな屋根面に見えるようなデザインを、変更案として作成しています。

設計者： 続いて、前回からの変更点についてご説明いたします。

屋根について、前回の案では、屋根を2段にしてリズムカルな印象を創出することで、既存建物との調和を図ることを意図していました。しかし、「既存建物よりも屋根の見えがかりが小さいため、連続性が感じられないのでは」というご意見を受けて、変更案を作成いたしました。

屋根の位置を下げ、2段の屋根の隙間を縮小して、一体の大屋根と見せることで、既存建物との連続性を強調しています。一旦案を作成させていただきましたが、前回の案の方が良いという可能性も感じておりますので、比較の上、ご意見いただければ幸いです。

窓について、外壁に枠を設けると共に、サッシを内側に取り付けることでより陰影が出るように変更いたしました。

壁面について、田の字窓の壁面に、大劇場に採用されている壁面の目地を追加し、陰影をつけることで壁面の分節化を行いました。

太陽光パネルについて、太陽光パネルの角度を20度から10度に変更して高さを下げることで、武庫川対岸からの景観に配慮いたしました。この変更により、武庫川対岸の河川敷や阪急電車の車窓からは、太陽光パネルがほぼ視認できなくなっています。宝来橋からはどうしても視認されますが、遠景となるため景観上の影響は少ないと考えます。

屋根の瓦について、大劇場の瓦の形状により近い製品へ変更し、既存の色ムラの暗い方の色味に合わせた特注色とすることを検討しています。

なお、ご意見をいただいた外壁の仕上げについては、検討を重ねた結果、コスト上非常に厳しいことから、砂壁上吹付塗装のままで進めたいと考えております。

会長： ありがとうございます。ご意見やご質問があればお願いします。

委員： 屋根の瓦について、ムラをつけて濃淡がでるようにするという理解で良いでしょうか。

事業者： その通りです。

委員： 図面に記載されている 5R5/6 というマンセル値は、既存建物の色彩とは若干異なるかと思います。

事業者： 既存建物の図面等を調べて、実際に使用されているものに近いマンセル値を記載していますが、詳細については現場に入ってから調整していきます。

委員： 既存合わせとする際には、現物と比較することが非常に大切です。既存の屋根の瓦は保存されていないのでしょうか。  
今回は、地上から既存建物を確認し、マンセル値を検討されたのですか。

事業者： 保存しているものはないため、地上からの確認で検討しています。ただ、実際現場が進む中で、現物と比較しながら、微調整していく必要性はあると思っています。

委員： 設計段階で、屋根の上に乗って、現物の色を確認していただくことが望ましいです。遠目で見たものと、現物を確認するのでは、随分と違うと思います。  
瓦が割れた時の修繕などはどうされていますか。

事業者： 幸いこれまで屋根の瓦が割れたことがありませんでした。

委員： 今後は、実際に施工した瓦を現物保管していただくことを推奨します。経年劣化などでの差異もありますが、施工した実物が手元があれば、既存合わせで計画したり、修繕していく際に活用できると思います。  
また、外壁についても同様に、過去の塗り見本や塗り板をサンプルとして保管していただくことが望ましいです。

事業者： 外壁について、既存の大劇場の外壁は、素地で塗料は入っていないようです。また、コテ仕上げですので、職人や日ごとの違いがあり、標準パターンを残すのは現実的には難しいと思います。部分的に補修した箇所には塗装した部分もあるのですが、塗装色も特注で、把握が難しい状況です。

委員： 既存の把握は難しいところもあると思いますが、施工した現物を保管していただくと、今後の修繕や増築時に活用できると思いますので、是非ご検討ください。

また、今回は経年変化したものに対する既存合わせとなりますので、どのように色を合わせるのかがポイントです。今図面で示されているのは4.05Y8.0/1.25 ですが、少し暖かみのある2.5Yの方が、恐らく既存に近い印象となると思います。このあたりの色相の差だけでも、随分とイメージが違ってきますので、是非現場でしっかりと合わせてください。

事業者： 既存合わせについては、新規に計画する建物が既存建物に溶け込むように、実際に現地で沢山のサンプルを持ってきて、悩みながら素材や色の選択をしてきております。しかしながら、経年変化や施工のムラなどもあり、既存の正確な把握は難しく、また、全く同じ材質でもないため、全く同じ見目にするのは非常に難しいと感じています。しかし、コンセプトとして考えている中世のまちなみのように、「まちなみとして統一感があり美しい」というところは、しっかりと確保できるよう進めていきたいと思っています。

また、今回いただいたご意見を踏まえて、今後は現物や施工記録等を保存し、継承していけるように考えていきたいと思っています。

委員： ミュンヘンなどでは、屋根瓦は一色でなく、ムラが多く色彩に幅があります。

ムラの幅があるからこそ、色々な景色に調和しているという側面もありますので、全く同じ見目ということではなく、ある程度の幅はあって良いと思います。まちなみとしての統一感がでるよう意識して、調整いただくことで良いと思いますので、よろしくお願いします。

窓枠に使われている緑色ですが、窓枠には陰影がつくよう工夫していただいております。影が入ってくると思います。影があっても、色の認識はできるのでしょうか。また、この色は既存合わせでしょうか。

事業者： この色は既存合わせで、大劇場の鉄部分のものです。施設の指定色として、他の部分にも順次取り入れているような色です。

委員： 例えば、南立面の1階部分と6階部分は、影が強くてでくると思いますので、この部分は、緑のイメージがあまり出てこないと思います。明度や彩度をもう少し上げて良いかもしれません。指定色として統一するのか、見え方を揃えるように調整するのか、少しゆらぎを持たせるのかなど、是非再度検討してい

ただければと思います。

委員： 外壁仕上げについて、既存の大劇場の仕上げは、壁面が平滑でなく色々な陰影があることで高級感や落ち着きを出しており、非常によく考えて作られたのだなと思います。

前回、計画建物についても、既存合わせでコテ仕上げとしていただきたい旨の意見をさせていただきました。検討いただいた結果、やはりコストが厳しく採用できないとのことで、理解はいたしました。コテ仕上げにコストがかかるということはおっしゃる通りだと思いますし、建築資材の高騰等もあるかと思えます。ですが、やはり武庫川沿いの景観は、宝塚市にとって一つの大きな顔となる場所です。コテ仕上げは、景観上大きな影響がでる部分ですので、何とか再度検討していただくことはできないでしょうか。30年後を見越して、景観を作るという心意気を持って、コテ仕上げを採用いただきたいという思いです。

事業者： ご意見の趣旨は非常によく分かります。コテ仕上げについては、我々も非常に愛着があり、できることならコテ仕上げとしたい気持ちは持っています。ただ、社会的な建築資材の高騰等により、予算上非常に厳しく、現実的には可能性は非常に低いです。

委員： 分かりました。しかし、必ずしもコテ仕上げでなくても、別の方法で、壁面に表情を出す工夫はできないでしょうか。屋根や壁面の凹凸、サッシの奥行等については非常に工夫いただいています。やはり面積の大きな壁面にもう少し陰影が出るように工夫していただきたいということです。

例えば、吹付の厚みを増す等で凹凸が出るようにするという方法もあります。

事業者： 現時点では、砂壁状吹付塗装が精一杯というところかと思えます。

今回区域の既存建物は複数ありますが、非常に手間も予算もかかったのだろうという建物もあれば、低予算で苦労しただろうという跡が見られる建物もあります。どの建物も、その時々条件や制約の中で、一体感を損なわない工夫を重ねてきたからこそ、全体として一体の建物群として見えているのだろうと感じています。

そういった意味では、今回も、様々な条件や制約の中での計画であり、現時点では砂壁状吹付塗装という回答にはなりますが、細部の色味やデザインの工夫を重ねて、周囲に馴染む、まちなみと一体となった建物となるよう進めていきたいと思っております。

委員： 様々な事情があることは理解できます。できれば、施工段階でも再度検討して、コテ仕上げやその他風合いのするような仕上げを採用できるような調整ができないか粘り続けていただきたいという思いもありますが、それらができない場合には、おっしゃられたように色々と工夫をして進めていただければと思います。

設計者： 少し時間はかかるかもしれませんが、ツタのようなもので壁面緑化して優しい雰囲気を出すなどの工夫もあるかもしれません。色々と検討して参ります。

委員： 今回の計画地は、武庫川対岸から見ると、計画地は視線が抜けて、緑が多くて非常に良い場所です。今回の建物計画で、緑が減り視線が遮られ、景観が大きく変わってしまい残念に思ったというのが率直な感想です。

先ほどの委員の意見にもありましたが、特に6階の横連窓の緑色が見えづらいたらうと思っています。この辺りは赤色の瓦と、黄味を帯びた白い外壁、鉄部分の緑が美しいですので、せっかくの緑色が視認できないと勿体ないと思います。光の加減も考慮して緑がしっかり見えるかご検討いただければと思います。

また、窓の大きさについて、2～3階よりも4～5階の窓の方が縦幅が大きいようにお見受けします。上階の方にボリュームがあると、動きを感じてカジュアルな雰囲気になってしまい、コンセプトにされている中世のまちなみのような落ち着いたある雰囲気と相違してしまっているように感じました。

設計者： 窓の大きさについては、2～3階の窓をもう少し縦長にすることでバランスを整えていくことを検討しているところです。

委員： 田の字の窓の横幅については、縦長の窓と同じでしょうか。  
横幅を若干小さくする方が安定感が出ると思うのですがいかがでしょうか。

事業者： 窓を小さくすると、壁面が多くなりつつぱりとした印象になることも懸念しており、全体を見ながら微調整をしていく必要があると思っています。

全体的に凹凸を出しづらい計画なので、その中でいかに変化をつけるかという部分は、設計者に詳細を検討していただいているところです。

設計者： 田の字窓は、非常用エレベーターの乗降ロビーになっており、自然排煙に必要な一定の面積を確保するための大きさである側面もあります。

委員： 設計コンセプトのご説明の際に、パサージュという言葉がありましたが、新築建物と既存建物の間という理解でよろしいでしょうか。

設計者： そうです。敷地内での考え方になりますが、通路状の空間をとり、建物配置のバランスを取ったというところです。

委員： テラスの居心地を良くするという点に着目すると、建築計画で対応するというよりは、外構や植栽計画で対応する部分が多いのかもしれませんが、あまり無機質な壁が立っているような空間だと、既存のテラスの印象とは大きく変わってしまうような気がします。テラスの空間も良い空間となるようご検討いただければと思います。

設計者： 敷地内に建物が建つことで、外部空間が少なくなってしまう中で、パサージュやテラス空間で心地よい空間を作っていくというようなことを考えました。

また、武庫川付近の大きなクスノキを保全するよう計画しており、心地よい空間をつくりながら、隙間を設けて武庫川へ結びつく景色をつくっていくことが出来るよう配置しました。

引き続き事業者とも協議をしながら、武庫川沿いにも敷地内にも、良い外部空間をつくっていくように調整していきたいと思っています。

委員： 前回意見した屋根のボリュームについて、色々と工夫していただきありがとうございます。上手く周囲の建物と調和するのではないかと思います。

委員： 他の委員から意見がありました外壁のコテ仕上げについて、薄塗の砂壁状吹付で本当に良いのかなという疑問はやはり残っています。

色々と検討いただいて、様々な工夫が各所に散りばめられており、非常に手のかかった物件になるのだろうとは思いますが、やはりコテ仕上げがないと、と心残りがでてくるようなことが無いように、施工の細部まで丁寧に仕上げていただきたいなと思います。

会長： 武庫川沿いの大きな建物のほとんどが、武庫川の川砂の色をベースとしたアースカラーで構成されています。これらの建物を背景に建つという大きな視点も含めて、最終的に色彩やデザインを決めていただければと思います。宜しくお願いいたします。

事務局： 屋根について、冒頭に設計者からご説明があつたのですが、前回案と変更案



を比較して、前回案の方が良いというようなご意見はないでしょうか。

会 長： 前回案の方が良かったという意見が出ませんでしたので、今回色々と検討していただいた変更案の方が良かったということだと思います。

色々な意見がでましたので、是非参考にしていただいて、良いものにしていただければと思います。

それでは、本日の協議はこれで終了とします。

以 上